

インタビュー・1

オープン・イノベーションと応用的研究開発の取組みを一段と加速

2013年4月、NTTグループの北米ハブ機能とIP (Intellectual Property) 開発を担う先駆的研究開発 (R&D) 拠点として、北米シリコンバレーに設立されたNTT Innovation Institute, Inc. (NTT I³: NTTアイキューブ)。NTTグループのグローバル成長戦略実現に向けた戦略的R&D組織としてのNTT I³の2年間の取組みと今後の展開について、Sri Koushik President & CEOにお話をうかがった。

オープン・イノベーションと
応用的研究開発に注力

——2013年4月の設立から丸2年経過しました。改めてNTT I³様の主要ミッションからお聞かせください。

Sri Koushik NTT I³は、シリコンバレーを拠点に、イノベーションと応用的研究開発を推進することを目的に設立されました。NTTグループ全体のR&Dミッションの一翼を担いますが、特にグローバルの市場を意識し、NTTグループのグローバルビジネスへの貢献を目指しているというのが特徴です。加えて、オープン・イノベーションのR&Dにも取り組んでいます。これまでは、革新的な独自技術でいかに利益を得るかを考え、連携することはあまり考えていませんでした。しかし、技術やマーケットの変化のスピードが増している現在、プロプライエタリのイノベーションでは限定的になってしまいます。そこで我々は、独占ではなくいかに協創するかを基軸に、オープン・イノベーションの研究開発を加速しています。優れたアイデアがあれば、スタートアップ企

業であれ、お客さまやNTT事業会社であれ、積極的に連携して、パートナーエコシステムによるイノベーションの共有を目指します。

また、アプライドR&D、すなわち応用的研究開発にも注力しています。NTTは次世代ICTのコアR&Dに多額の投資をしていますが、NTT I³はこのコアR&Dのイノベーションを応用して法人顧客のビジネスを支援する応用的研究開発を推進しています。例えば、NTTと東レはNTT先端技術総合研究所が開発した繊維の表面に導電性高分子をコーティングする技術を活用し、着衣するだけで心拍数・心電波形などの生体情報を取得できる機能素材「hitoe」を開発・



NTT Innovation Institute, Inc.
President & CEO
Sri Koushik氏

実用化しています。これは、まさにコアR&Dの成果です。NTT I³では、コアR&Dの成果である「hitoe」をどのように医療系やヘルスケア関連企業などが活用できるかの応用的研究も推進しているのです。

4つの領域のプラットフォーム
の開発・製品化の取組みを加速

——現在、重点施策としてどのような取組みに注力されていますか。

Sri Koushik 法人顧客のビジネスを支援する応用的研究の中核となるイノベティブなプラットフォームとして現在、「クラウド」「セキュ

CONSUMED AS-A-SERVICE
SCALABLE, SECURE AND EXTENSIBLE
HIGHLY COHESIVE SET OF SERVICES
LOOSELY COUPLED WITH PARTNER SYSTEMS
ENABLED BY OPEN API'S
PROVIDES VALUE TO ALL PARTICIPANTS



図1 多面的なプラットフォーム開発に注力

リティ」「インフラ」「機械学習」の4つの領域の多面的なプラットフォーム、すなわち「CSOP; Cloud Services Orchestration Platform」「GTIP; Global Threat Intelligence Platform」「ESIP; Elastic Services Infrastructure Platform」「Machine Learning Platform」の開発・商品化を進めています(図1)。いずれもオープンAPI仕様で、NTT研究所や事業会社、先端企業との連携を基軸に開発し、クラウドサービスとして提供します。開発は、NTT I³ならではの開発ライフサイクル管理モデルを用い、アジャイル型で行います。私はこの開発管理モデルがNTT I³の1つの核だと思っています。

——その開発管理モデルの特徴をお聞かせください。

Srini Koushik 発想(アイデア出し)→概念実証(PoC)→MVP(最小の実用製品)→NTT事業会社向けβ版→顧客向けβ版→製品版リリースの6つのフェーズからなる管理モデルを構築しました。このモデルには、大きく2つの特徴があります。1つは、スピード重視です。開発開始から12~24カ月での製品版リリースを目指しています。スタートアップ企業の多くは、2~3年で製品を市場に投入するのが一般的ですので、それよりも速い。2つ目が従来の研究開発マネジメント手法との違いですが、開発の初期段階(PoC)からNTT事業会社や顧客と一緒に開発するという点です。4つのプラットフォームのうち、「CSOP」「GTIP」「ESIP」は、すでに

NTTグループ企業やパートナー企業と連携し、β版トライアルを開始しています。なお現在開発中の「Machine Learning Platform」は、法人顧客のビジネスを支援することを狙いに、専門的なプログラマーやデータサイエンティストを多数擁しなくても、プロトタイプモデル構築やデータ分析などを可能にすることを目指しています。

——2015年の課題として、どのようなことがあげられますか。

Srini Koushik 各プラットフォームについて顧客企業におけるトライアルを実施し、いち早く商用導入することです。そのためには、高品質なデリバリー体制とサポート体制を確立する必要があります。このため、法人顧客へのソリューションの実装に精通し、豊富な知見と実績を持つNina Simosko氏を約3カ月前にCPO(Chief Product Officer)として招聘しました。

イノベティブなプラットフォームの持続的開発・提供が発展の鍵

——開発済のプラットフォームの顧客企業への導入目標は……。

Srini Koushik クラウドプラットフォームである「CSOP」については、2015年の第一四半期に最初の開発実績ができました。私の目標としては、「CSOP」「GTIP」「ESIP」の3つのプラットフォームごとに、向こう1年間で10社ずつの導入実績を目指しています。

——最後に、今後の展開と抱負をお聞かせください。

Srini Koushik この2年間は、本年7月1日にNTT先端技術総合研究所長として日本に戻られる桑名栄二前COOと一緒に、まず第一にシリコンバレーで組織を立ち上げることに注力しました。NTTは売上高10兆1千億円を誇るグローバル企業ですが、グローバル市場での知名度はまだ低い。シリコンバレーでのプレゼンス向上が、知名度を高めることにつながると思い、積極的な情報発信に加え、顧客へのブリーフィングやコラボレーション用の設備を備えた「CXC(カスタマーエクスペリエンスセンター)」を活用し、プレゼンス向上に努めてきました。2つ目は、前述したNTT I³ならではのイノベティブなプラットフォーム開発です。ツールやプロダクト開発重視から、顧客ニーズや市場の変化に柔軟かつ迅速に対応できるようにプラットフォーム開発へと方針転換しました。これは一過性ではなく持続的な取り組みです。現在、市場ではNTT I³が開発したプラットフォームは非常にイノベティブだと評価されています。来年も再来年もそのように言われ続けたいと思っています。そのためには、イノベティブなアイデアを持続的に出し続けることが重要です。NTT R&Dとの連携を基軸に、イノベティブなアイデアに基づくプラットフォームの持続的開発・提供が、NTT I³発展の鍵だと思っています。

——本日は有難うございました。

(聞き手・構成:特別編集委員 河西義人)